
ラベンダーの癒し

虹色恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラベンダーの癒し

【Nコード】

N4823E

【作者名】

虹色恵

【あらすじ】

エステシャン美菜は、客の体に触れると、客の体、心の痛みが見えてしまう不思議な能力を持っている美菜は、その体と心の痛みを取り除き、癒していくのだった。

プロローグ（前書き）

現代も過去も、人はいろいろな悩みに打ちひしがれ、心から癒しを求めている。心の痛みは、体の痛みになって表れる。その体の痛みを癒そうと、人はマッサージに通うのだが、本当の癒しは、心まで届く。心が解放されたとき、人は一陣のラベンダー色の風が心を通り抜けたような、そんな感じがするのだった。そんなサロンがあったらいいな、と思い、この小説を書き始めました。

プロローグ

彼女の名前は、美菜。35歳。家族は、サラリーマンの夫とゴードレン・レトリバーのルンバの3人暮らし。美菜は、アロマオイルで全身をマツサージするエステシャンだ。スラリとした体つきで、肩まである髪の毛の長めの前髪に隠れるようにのぞく切れ長の瞳は、憂いを秘めていた。この仕事についたとき、彼女の体に電撃が走った。「これだ！」エステの仕事が、彼女が捜し求めていた天職だと感じたのだ。

彼女には、不思議な能力があった。客の体に触れると、その体の痛みと同時に、心の痛みが伝わってくるのだ。それは彼女の脳裏を駆けめぐり、その客と一体となり、彼女の癒しの力は、客の深い痛みを包み込み、解放へと向かわせてしまうのだった。客が彼女の店を出るとき、なんともいえない、雨上がりの虹を見たような、そんな感覚になった。それが、彼女の心をも晴れ晴れとさせた。彼女は、自分の店にやってくる疲れた人々を癒すのが勤めだと感じていた。施術の後の一服のお茶と、自分で焼いたクッキーを出しながら、スツキリとした客の顔をながめるのが好きだった。

彼女の店は、街外れの静かな一角にあった。しばらく空き家だったものの内装を簡単に改装した、窓の大きい、こじんまりとした三角の屋根のお店だった。看板も何もなく、そこが何の建物か、近所でも知らない人もいた。ひっそりと、そこだけ異空間のような雰囲気が漂っていた。ツタが白い壁をいっぱいに這っていた。そのツタのような形の門を開けると、玄関へ踏み石が続いていた。5、6個の踏み石を渡ると、大きな板でできた玄関に着いた。客達は、そこに着くと、ひとつため息をついて、呼び鈴がないので、玄関のドアを軽くトントンと叩くのだった。すると、しばらくして、おもむろに玄関のドアが開き、涼しげに微笑む美菜の顔がのぞくのだった。

客は、美菜の顔を見るとほっとして、安心して促されるままに家中に足を踏み入れるのだった。

6月の梅雨のど真ん中。きょうも客からの依頼があった。美菜と同一年くらい的女性だ。朝、夫をいつものように送り出し、ルンバの散歩を済ますと、軽い朝食をとった。日課のにんじんジュース、玄米とあじの開きと味噌汁、お漬物というメニューだ。体がよろこんでいるな、美菜はそう感じた。美菜は、豚肉、牛肉のような、4つ足の肉を食べると、悲鳴が聞こえるような気がした。子供のころは何も考えず食べていたが、いつのころからか、食べなくなった。夫も魚党なので、ちょうどよかった。しばらく肉を食べないでいると、食べたくなくなってきた。食べなくても体が調子いい。かえって前よりも調子よくなったような気がした。

予約は午後2時からだった。美菜の店は、住んでいるマンションから歩いて10分くらいのところにあつた。自分の店を持つのが夢だった美菜は、安く借りられる物件を見つけ、きれいに掃除して自分の城にした。内装は、緑と白を基調に、落ち着いた雰囲気にした。なぜか暖炉があつた。美菜は、この城が気に入っていた。ベッドを設置し、大き目の緑色のバスタオルを敷いた。赤や橙、黄色のポールが連なつたアジアン風のランプを3カ所に吊るした。部屋を暗くしてそのランプをつけると、幻想的だった。

一通り家事を済ますと、お気に入りの大き目のゆつたりとした藤の椅子に座り、大き目のマグカップに入れたカフェオレを飲みながら、雨に濡れる庭の新緑をながめた。ルンバが足元に満足そうに寝そべっている。美菜は、この時間が好きだった。しなやかな肢体を椅子にもたれさせ、とりとめのないことを考えながら、庭の風景に目を遊ばせた。そして、少しずつ主婦からエスプレッソとしての美菜へとシフトしていくのだった。

美菜は、自分の能力を不思議に思った。なぜ、客の体を触ると、その人の心が見えてしまうのか……。最初はびっくりしたが、次第にその能力に集中し始めた。自分の指から何かが流れていき、客

の体も心も模索するのだ。この客は、何を求めているのか。何に悲しんでいるのか。仕事をした後、自分がちつとも疲れていないのを感じた。これが私の使命なのかしら・・・、美菜はそう思った。美菜自身にも悩みがないわけではなかった。小さい頃から少し変わったしているとまわりから思われていた。いつもぼんやりとしていたのだ。そして同い年の子達との会話がかみ合わず、仲間はずれにされたりもした。実菜が一足先に心が大人になっていたからかもしれない。成熟した子供だったのだ。淋しい子供時代の影響で、美菜は人見知りだった。客に対しても、一歩引いたところで微笑んでいた。でも、そんな美菜が居心地よく、客は心を許していった。

第1話 赤いアザ

12時になった。もうすぐ店に行かなければ・・・庭の景色に遊ばせていた美菜の目が、仕事のモードに入った。客が来る前にやることは、たくさんあった。急いで身支度をし、ルンバに、「ちゃんとお留守番していてね。ママは、お仕事に行ってくるからね。」と言って頭をなでた。ルンバは、淋しがってくんくん鳴いたが、じきに、好きにすれば、僕を置いていけばいいや、とでも言いたげにそっぽを向いて寝てしまった。苦笑いをして、美菜はじゃあね、と言って玄関を閉めた。

雨の中、車を走らせていると、美菜の脳裏に女性の泣き叫ぶ声とある思いが走り抜けた。

「行かないでーっ」

それはとても悲しい思いだった。こんなことはめずらしかった。客が店に向かっているときの想念が、美菜にぶつかってきたのだ。

（きょうのお客さんは、ちょっと頑張ろうかな！）

美菜は、身が引き締まる思いがした。雨が激しくなってきた。その雨を蹴散らしながら、美菜は店へと向かった。

店に着くと、軽い掃除をし、一連の支度をした。ランプをつけ、ローソクに火を灯した。薄暗い部屋に、ランプとローソクの灯りが浮かび上がり、美菜の影をゆらゆらと揺らした。ヒーリングミュージックをかけた。水が流れるような静かな音楽が部屋を満たした。

（きょうの香りは、何にしようかな。）

何十種類もあるアロマオイルの中から、哀しみを癒すラベンダーに、ほっとするカモミールを混ぜ、アロマポットに垂らした。香りは、下に置かれているローソクに炙られて、小さい部屋いっぱいに広がっていった。あとは客が来るのを待つだけだ。美菜は、客が近付いてくるのを感じた。哀しみの想念が近付いてきたのだ。その想念が、

扉を叩いた。

トントン

美菜はゆっくりと玄関に向かい、静かに扉を開いた。そこには、30代半ば位のふっくらした面長の女性が立っていて、美菜を見ると「はじめまして、上月蜜子です。よろしくお願いします。」

と、落ち着いた声で言い、ゆっくり頭を下げた。美菜は、微笑みながら、

「どうぞこちらへ」

と中へ促した。その蜜子という客は、中へ入ると、うつとりするよくな顔で部屋の中を見渡した。そして信頼するまなざしで美菜を見つめた。美菜のモスグリーン色のユニフォーム姿がラベンダーの香りの部屋と一体となり、もうすでに客を癒し始めていたのだ。

客をベッドにいざなうと、美菜は、

「きょうはようこそいらっしやいました。どうぞ気をお楽になさってください。まず服を全てお脱ぎになって、この紙パンツをはいていただけますか。そしてこのバスタオルを身体にかけ、ベッドにうつ伏せに寝てください。用意ができ次第、お声をかけていただけますか。」

と説明した。客は、はい、はいとうなずき、美菜がアジアン風の緑色の厚手の生地には竹やらくじやくやら森の風景が描かれているカーテンを閉めると、着替えを始めた。

上月蜜子と名乗った客は、アロママッサージは今日がはじめてだった。風のうわさで、ここのマッサージはとても気持ちがいいということを聞き、肩こりがつらいので、予約をしたのだ。蜜子は、少し肌寒いので着てきた黒のカーディガンを脱ぎ、淡いブルーのブラウスのボタンを外した。黒のフレアースカートを脱ぎ、ブラジャーもパンティもみんな脱ぎ、まとめて近くに置いてあったかごの中に入れた。そして紺の紙パンツを窮屈そうにはき終わると、大判のバスタオルをからだに巻きつけ、ベッドにうつ伏せになり、顔のここ

ろに空いている穴に顔をうずめた。ラベンダーの香りが鼻をくすぐった。一通り支度が終わると、

「できました」

と、美菜に声をかけた。はい、と美菜はカーテンを開けると、蜜子のもとに歩み寄り、優しく身体に巻きつけたバスタオルを掛けなおした。

「苦しくないですか」

「はい、大丈夫です」

美菜はゆっくりと蜜子の頭の方に行き、オイルを手に取りながら言った。

「わたしのお店では、最初のカウンセリングは行いません。なぜなら、お客様は、ご自分の心と身体の表層しか見えないからです。わたしの手が、お客様のお体に触れ、そしてお客様の問題点を探ります。だからお客様は、ゆったりと寝ていらっしゃってください。アロマオイルも、お客様の身体の状態を判断してから加えます。では、始めさせていただきます」

蜜子は、川の流れるような音楽に乗って、美菜の声が遠くのもやの中から聞こえてくるような気がした。少しドキドキしていた気持ちもなくなり、ベッドと美菜に自分の身体をあずけた。

月の浜辺にたゆたう波音　月の光が照らすものは何？

ただ一匹跳ねるイルカよ、お前は何を思う

月の光が気持ちいいのか　そうなのだね

月の光を浴びていると、何もかも忘れてしまえるのだね

そうか、イルカよ

お前は群れに戻らなくてもいいのかい？

もう少しここにいたいのだね

ここは、何も心配することのない場所だからね

何をそんなに悲しんでいるのかね

お前の瞳にこぼれた涙を、隠さなくてもいいんだよ
いいんだ、隠さなくても

悲しいときには、泣けばいいんだよ

お前の哀しみは、月の光が癒してくれる

しばらく、ここにいなさい、イルカよ

しばらく、ここにいなさい、イルカよ

ヒーリングミュージックに合わせてるように、美菜の口から言葉が流れ出てきた。それは歌うような声だった。蜜子は、最初びっくりしたが、美菜の柔らかな温かい手に触れられながら、その不思議な言葉を聞いていると、なんだか心の底から落ち着けるような気がした。そして、なぜだか、自分の目にも涙が浮かんでいたのだ。そしてその涙は、次第にぼろぼろとこぼれ始め、顔の下に置いてある水に浮かべた一輪のプルメリアの花に一粒、一粒かかった。

「痛かったらおっしゃってくださいね」

「はい、大丈夫です」

美菜は、マッサージを続けた。蜜子の身体は、筋肉がこわばって、凝っていた。それをもみほぐしながら、美菜の頭には、あるビジョンが現れ始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4823e/>

ラベンダーの癒し

2010年10月21日20時50分発行